

太鼓橋考

松村 博¹

¹正会員 (〒573-0013 枚方市星丘3-3-33)
E-mail:hmatsumura@leto.eonet.ne.jp

日本の神社の社頭などに大きな勾配をもった橋が架けられているのを目にすることが多い。これらは、一般的に太鼓橋と呼ばれ、日本全国で見ることができる。このような形態の橋がどのような経過で生まれ、定着していったのかを考察した。太鼓橋は、人々に宗教的結界を意識させるが、結果としてその内側へ人々をいざなう日本独特の宗教的装置であるといえる。その起源は、平安時代の浄土式庭園の反橋や京都五山などの三門前の石橋などに求めることができる。そして、その独特の形式が定着したのは、室町時代後期以降のことで、全国で築造されるようになったのは江戸時代の前期であると考えられる。

Key Words : *Hump backed bridges, Religious boundary, Jodo garden*

はじめに

神社の社頭などに設けられた大きな反りをもつ橋は様々な形態、形式を持っているが、親しみを込めて「太鼓橋」と呼ばれることが多い。太鼓橋は日本独特の形式の橋と考えられ、海外で日本文化を発信するときのツールとして用いられることもある。このような形態の橋は、どのような種類に分類できるのか、それらが生まれた歴史的経緯をどのようにとらえることができるのかを考察した。

1. 太鼓橋の分類

太鼓橋は、主として神社の境内への入口、すなわち鳥居の前後や本殿への入口に置かれているものがほとんどである。神社などへお参りする心構えをさせる役割を果たしている。その形にはいろいろなものがあり、それら

を分類してみると次のようになる。

(1) 形態的分类

- ① 渡ることが難しいもの、人が渡ることが想定されていないもの
- ② 一般の人の通行が認められているもの
- ③ 渡ることは可能であるが、祭礼時の神輿や神官、勅使など、特別な時期や人しか通行が認められていないもの

①の場合はもちろん、②の場合も足弱の人などのために、また③の場合も一般の参拝者のために、反橋に並行して平らな橋（平橋）が設けられている。

さらに、反橋と平橋が直列に並べられているところもある。これを④の形態として、太鼓橋を4つの形態に分類し、それぞれの実例を表-1に示す。

表-1 太鼓橋の分類と実例



反橋平橋並行配置	
①	 <p>写真-1 白毫寺太鼓橋 (兵庫) : 市指定文化財</p>
	 <p>写真-2 弥彦神社玉ノ橋 (新潟)</p>



写真-3 住吉大社反橋 (大阪)



写真-4 恐山太鼓橋 (青森)



写真-5 厳島神社反橋 (広島) : 重文



写真-6 賀茂別雷神社玉橋 (京都) : 重文



写真-7 宇佐八幡宮呉橋 (大分)



写真-8 諏訪大社下馬橋 (長野) : 町指定文化財

反橋平橋直列配置



写真-9 称名寺反橋 (神奈川)



写真-10 丹生都比売神社輪橋 (和歌山)

(2) 材料的、構造的分類

表-1 では主に木造の太鼓橋を挙げたので、石造の太鼓橋を列举すると、菅田(こんた)八幡宮放生橋 (大阪)、多賀大社反橋 (滋賀)、南宮大社輪橋 (岐阜)、伊賀八幡宮神橋 (愛知) (写真-11~14) などがある。ただ、木造でも

住吉大社反橋や丹生都比売(にゅうつひめ)神社輪橋などでは橋脚は石柱になっている。

橋の構造としては、アーチ構造はほとんど見られず、桁橋構造になっている。

その他、近年に架け換えられた太鼓橋では、両子寺無

明橋（大分）、鶴岡八幡宮太鼓橋（神奈川）のように鉄筋

コンクリート製のものもある(写真-15, 16)。



写真-11 菅田八幡宮放生橋（大阪）：市指定文化財



写真-12 多賀大社反橋（滋賀）：町指定文化財



写真-13 南宮大社輪橋（岐阜）：重文



写真-14 伊賀八幡宮神橋（愛知）：重文



写真-15 両子寺無明(むみょう)橋（大分）



写真-16 鶴岡(つるがおか)八幡宮太鼓橋（神奈川）



写真-17 高野山一の橋（和歌山）



写真-18 芦峯(あしくら)寺布橋（富山）

2. 太鼓橋の役割

社寺の境内に入るとき、大抵は橋を渡ることになる。意識しないほど小さな橋であることも多い。渡るのは自然の流れの場合もあり、人工的な堀であることもある。それらは神域、寺域など神聖な場を画する結界の意味を持っていると考えられる。神社の社頭で、水の流れがあれば、禊の意味が込められている場合もあるだろう。まれには、流れも堀もなく、橋だけが置かれていることもある。

橋を渡ることによって特別な意味が込められている例がある。その1例が高野山の奥の院への参道に設けられた3つの橋(写真-17)である。それぞれに宗教的な意味があり、参詣者はそれらを渡るごとに浄化が深まっていくことになる¹⁾。

越中立山の麓に架かる芦峯寺の布橋(写真-18)では、極楽往生を願う女性のために布橋灌頂会が行われた。布橋は天の浮橋とも呼ばれ、白布が敷かれた橋上を白装束の女性たちが渡る橋は重要な宗教施設でもあった²⁾。

これらの橋の意味が太鼓橋につながっている。

3. 太鼓橋の呼称と意味

神社などの参道に架けられた反りの大きな橋は、太鼓橋、反橋、輪橋のようにその形状を示したものの他に、玉橋(玉の橋)、呉橋、天の浮橋などのような名前が付けられているものもある。これらの呼称は、すでに古代の文献に表されているものである。それらを拾い上げると、以下のようなものがある。

〈呉橋〉 『日本書紀』推古20年条に、百濟から渡来した人の顔や身体が斑白(まだら)であったため、人々は気味悪がって海中の島に捨てようとした。しかしその人は「私の肌が斑白なのを嫌うのなら、国の中に白斑の牛馬を飼うべきではありません。私には、山岳の形を作るいささかの能力があります。私を留めて用いるならば、国のために役に立つことになるでしょう」といった。その言葉を聞き捨てにせず、須弥山の形と呉橋を南庭に作るよう命じられた。人々はその人を路子工(みちのこのたくみ)と呼んだという。

この記事からは呉橋がどのような橋であったかはわからないが、その語感から中国南部によく見られる反りの大きな石造アーチ橋を想像する人もある。岸俊男氏は『枕草子』では「くれはし」を長谷寺や清水寺の長い階段状の回廊を指していることも加えて、船の通航を確保するため長い階段をともなった橋の形状を想定している³⁾。

ただ、中国江南地方に隋唐時代にさかのぼる石造アーチ橋があった証拠は報告されていない。そして、日本においてはアーチ橋の導入は江戸時代になるまで見られない。このため呉橋を石造アーチ橋と結びつけることはできない。

〈天の浮橋〉 天の浮橋は、『古事記』上つ巻の国生み伝承の中に見られる。「伊邪那岐、伊邪那美の二神が天の浮橋の上に立ち、天の沼矛を地上に向かって指し下して、塩をコロコロとかき混ぜているとき、その先から滴り落

ちた塩が積もって島となった。」とされている。浮橋とは、船を連ねて人を渡す簡易な橋のことをいうようだが、人々は想像力を働かせて天上に架かる橋へと昇華させた。

〈玉橋〉 同様に、玉橋も『万葉集』巻9、1764に七夕の歌として詠まれた中に表現されているように天空の橋としてイメージを膨らませたものである。

このように太鼓橋のイメージは古代から人々の想像力の中に育まれていた可能性はある。しかし、絵画や遺構として残されているものはなく、具体的な証拠を捉えることはできない。

4. 太鼓橋の起源

反りの大きな橋が架けられた具体的な証拠はいつごろまでさかのぼることができるのであろうか。太鼓橋につながるようなものとしては、まず、平城京の東院庭園の橋の遺構が目目される。この庭園は発掘調査に基づいて復元されている(写真-19)。橋杭には建物遺構で確認された八角形断面の杭が用いられた⁴⁾。また園池にL字状に配された橋は、平橋と反橋として復元されているが、反橋が当時どの程度の反りを持っていたかはわからない。



写真-19 平城京の東院庭園の橋(奈良)



写真-20 白水・阿弥陀堂の池と橋(福島)

(1) 寝殿造系の庭園の反橋

平安時代には、京都の貴族の館に寝殿造系の庭園が発展する。大きな主館の前や周辺に人工の池と島を配した庭が作られた。その形は、当時の文書や少し時代は下るが、各種の絵巻物に具体的に描かれている。『年中行事絵巻』などにより平安時代後期の撰関家の邸宅の様子を知ることができる。庭には池が設けられ、いくらか反りを

持つ橋が架けられている。橋には朱塗りの欄干が設けられ、端部の男柱と袖柱には擬宝珠が付けられている。また橋桁の側面には剣巴文様の装飾が施されている。

『法然上人絵伝』⁵⁾には、九条兼実邸（月輪殿）が描かれているが、庭に池と小島を配して、それぞれが平橋と反橋で結ばれている（図-1）。この配置は完成された寝殿造系庭園を表したものと考えられる。寝殿造系庭園の作庭法を説明した書物に平安時代後期に編まれた『作庭記』がある。記述は池の作り方と石の配置の方法が中心であるが、橋の架け方にも言及している。「そり橋の下が御殿の上座から見えるのは良くないことであるから、橋の下には大きな石をたくさん立てるべきである。また島から橋を渡す場合は正面を御殿の階段の中心に向けてはならない。筋を変えて、橋の東の柱を階段の西の柱の方向に向けるべきである。」と説明されている⁶⁾。橋はやや斜めから見るのが姿良く見えるためである。また対称形を嫌い、自然体を好む日本人の美意識の表現でもあろう。

(2) 浄土式庭園の反橋

平安時代の中期以降、貴族を中心に浄土信仰が高まり、この世に浄土を具現した寺院が立てられた。その浄土式寺院には寝殿造の邸が施入されたものもあり、堂宇前の

庭園にはその形式が用いられた。そのいくつかが発掘調査などで確認されているが、奈良・円成寺、平泉・毛越寺、白水・阿弥陀堂などでは本堂の南に池が配され、小島を挟んで2つの橋が架けられていたことが確認されている⁷⁾。その1つ、白水・阿弥陀堂の池と橋が復元されている（写真-20）。このころの同種の庭園に奈良・大乘院の庭園があり、復元、公開されている。

浄土系の寺院は私的な信仰の場であったが、鎌倉時代には多くの人々に開かれた社寺の参道に平橋と反橋が直列に配された形態が生まれたと考えられる。その1例が、横浜の称名寺と静岡の三島社である。

称名寺は元享年間（1320年代）に北条氏によって建てられたもので、そのころに描かれた境内図には、南門から本堂への参道に反橋と平橋が架けられている様子が描かれている。

また、13世紀末に完成したとされる『一遍上人絵伝』⁸⁾には三島社の中央の参道に架けられた反橋と平橋が描かれている（図-2）。

これらから社寺の参道に反橋が架けられた時期は、鎌倉時代後期にさかのぼることが確認できる。その形態は、なお寝殿造系庭園の形態を踏襲するものであった。その貴重な称名寺の庭園と橋は昭和61年に復元されている。

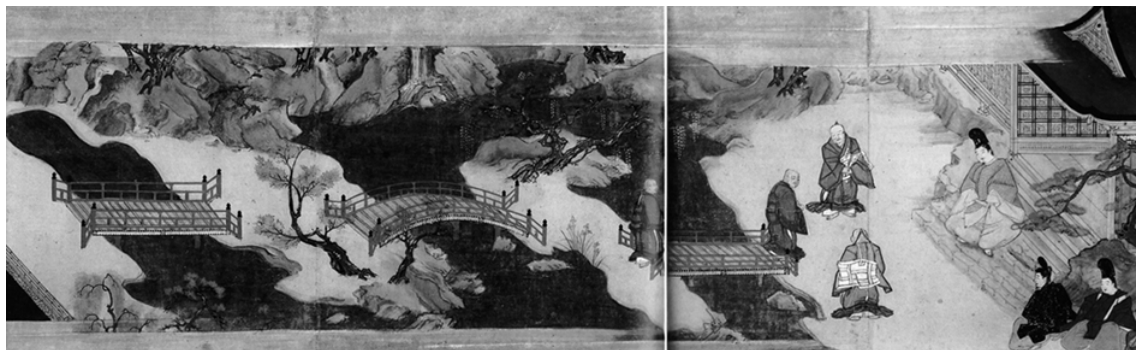


図-1 九条兼実邸（月輪殿）の庭園（『法然上人絵伝』文献5）より



図-2 三島社の参道（『一遍上人絵伝』文献8）より

(3) 泮地の石橋

厳密には庭園ではないが、京都の禅宗寺院の三門の前に置かれた石橋も、太鼓橋が生まれるきっかけを与えたものと考えられる。南禅寺を始め、東福寺、相国寺、天竜寺などの京都五山の他、妙心寺でも見ることができる。

伽藍配置の中で、総門と三門の間に泮地（ばんち）と呼ばれる左右対称形の池が配され、その上に少し反りを持った幅の広い石橋が渡されているが、同じ形態のものが中国の寺院や孔子廟などにも見られるという⁹⁾。俗世から聖地に入る境界を示す意味があると考えられる。



写真-21 南禅寺三門前石橋



写真-22 東福寺三門前石橋



写真-23 日吉大社大宮橋 (滋賀)

これらの石橋の形式は桁橋であるが、円形の橋脚柱に支えられた梁の上に切石の主桁が置かれ、主桁の角を切り込んだ中に橋板が落とし込まれており、構造高を低く見せる工夫がされている(写真-21, 22)。

この手法は日吉大社の大宮橋などでも用いられ、南宮大社の輪橋や多賀大社の反橋にも基本的に同じ構造が採用されており、太鼓橋の形態および構造にも影響を及ぼしたと考えられる。

5. 太鼓橋の出現

その後、反橋の形態がどのように変化したのかは十分に把握することはできないが、室町時代後期になって変化が生じたと考えられる。その一例が宮島・厳島神社の本殿の西側に架かる反橋である。高欄の擬宝珠に弘治3年(1557)の銘があり、確認できる反橋では最も古いものである。また、大阪・住吉大社の反橋が初めて描かれているのは16世紀前半の社頭図であるとされている¹⁰⁾。

その後、豊臣時代を経て、江戸時代初期には社頭に反りの大きな橋が架けられることが定着していったと考えられる。そのうちのいくつかの反橋には豊臣氏の寄進によって架けられたとする言い伝えがある。例えば、滋賀・多賀大社の反橋は豊臣秀吉が架けたとされ、和歌山・丹生都比売神社の輪橋は淀君、住吉大社の反橋も淀君か秀頼が寄進したと伝えられている。また、滋賀・日吉大社の大宮橋や二宮橋も豊臣秀吉によって架けられたとされてきた。しかし、多賀大社の反橋は、寛永15年(1638)に幕府の援助を得て架けられたもので、大宮橋なども石橋になったのは寛文9年(1669)のことである。

豊臣秀吉が架けたとする言い伝えが生まれたのは、豊臣氏が社寺に多くの寄進を行ったことも原因であるが、「太閤橋」と「太鼓橋」の音の類似から生じたものもあったと考えられる。

表-2 滋賀県甲賀地域の石造太鼓橋¹¹⁾

番号	橋名	場所	径間	規模	建設年代	年代根拠	文化財
1	大鳥神社・反橋	甲賀市甲賀町鳥居野	3	長10.5m、幅3.5m	延享元年(1744)	刻銘(親柱)	市指定
2	つばき 樺神社・太鼓橋	甲賀市甲賀町隠岐	2	長4.7m、幅2.45m	宝暦9年(1759)	刻銘(親柱)	
3	やがわ 矢川神社・太鼓橋	甲賀市甲南町森尻	4	長5.4m、幅3.7m	寛文11年(1671)	文書	市指定
4	わの 和野八幡神社・反橋	甲賀市水口町和野	2		元禄16年(1703)	刻銘(親柱)	
5	八坂神社・下馬橋	甲賀市水口町巖峨	2	長3.5m、幅2.4m	元禄12年(1699)	刻銘(中列桁側面)	市指定
6	みなくち 水口神社・太鼓橋	甲賀市水口町宮の前	4	長5.7m、幅3.35m			
7	かしわぎ 栢木神社・太鼓橋	甲賀市水口町北脇	2	長4.05m、幅2.75			
8	うった 宇田八幡神社・太鼓橋	甲賀市水口町宇田	2				
9	くになか 国中神社・太鼓橋	甲賀市水口町植	2		昭和10年	刻銘(桁横)	
10	三十八社・太鼓橋	甲賀市水口町伴中山	2		元禄年間	文書	
11	きぶね 貴船神社・太鼓橋	湖南市甲西町岩根	2				

表—3 滋賀県甲賀地域の石造太鼓橋の写真

<p>1. 大鳥神社 (甲賀市甲賀町鳥居野)</p>	<p>2. 椿神社 (甲賀市甲賀町隠岐)</p>	<p>3. 矢川神社 (甲賀市甲南町森尻)</p>
<p>4. 和野八幡神社 (甲賀市水口町和野)</p>	<p>5. 八坂神社 (甲賀市水口町巖峨)</p>	<p>6. 水口神社 (甲賀市水口町宮の前)</p>
<p>7. 柏木神社 (甲賀市水口町北脇)</p>	<p>8. 宇田八幡神社 (甲賀市水口町宇田)</p>	<p>9. 国中神社 (甲賀市水口町植)</p>
<p>10. 三十八社 (甲賀市水口町伴中山)</p>	<p>11. 貴船神社 (湖南市甲西町岩根)</p>	

6. 滋賀県甲賀地域の太鼓橋

滋賀県の甲賀市、湖南市の神社の社頭には小規模な石橋が架けられているところが多くあるが、それらのうち、太鼓橋を選んで、表-2、3に示した。これほど多くの太鼓橋が集中して見られる地域は全国でも珍しいと思われる。

勾配はまちまちで、大人でも登れない急なものもある。大鳥神社の反橋を除いては、反橋に並行して平橋があることから、これらの反橋は、人が渡ることは想定されていないと考えられる。

構造的にはアーチは見られず、すべて桁橋である。

これらの石橋には、築造年月や寄進者、寄進の目的、そして築造者の名前が彫り込まれたものがある。八坂神社下馬橋では、中桁の側面に多くの文字が刻まれており、「奉拝進石橋/ 雨乞御返禮

元禄十二乙卯年/ 八月吉祥日」

の他に、寄進した村の庄屋などの名前があり、「泉州日根之郡/ 鳥取荘下□村/ 石細工□□作」(□は不読)と、橋を造った石工と思われる名前が見える。また、別の箇所には、「天保五甲□年/ 三月吉日」のほかに、寄進者の村の名前、神主の名前などが彫られ、「泉州尾崎村/ 石工□□正」の文字も見える。

これらの文字から、この石橋が元禄12年(1699)に雨乞い成就のお礼に周辺の村々の寄進によって造られ、天保5年(1834)に修復されていることが分かる。そしていずれも泉州(大阪府の南部)の日根野郡や尾崎村の石工が造っているのは注目される。この近くにも石工集団がいたはずなのに、わざわざ遠方の石工が関わったのは、泉州地方の石工がこの地方と特別の関係をもっていたのか、それほど広い地域で活躍していたのか、興味深い、そ

の解明は今後のテーマである。

この他、和野八幡神社の小さな石橋の親柱には、「元禄十六年/ 正月吉日」や寄進者の個人名も刻まれている。大鳥神社石橋の親柱にも「延享元年甲子三月一日」と「石工杉本文右衛門」の刻がある。

これらを丁寧に調査すれば、より深い地域史の史料を得ることが期待できる。

7. 太鼓橋の価値

太鼓橋は、長い歴史の中で育まれてきた日本独自の空間演出の手段であると言えそうである。改めてその価値を考えたい。

1) 文化財的価値

太鼓橋は、今回調べた限りでは、室町時代後期以前にさかのぼるものは見付けられなかったが、江戸時代前期に築造された橋も多く、国の重要文化財や市町指定文化財になっているものもあり、長く保存すべき対象である。

2) 史的価値

6章で示したように、地域史研究の貴重な資料となりうるものである。また、大阪・住吉大社の反橋の擬宝珠の銘から、橋板の修復は大阪の船大工の人々によって寄進されていることがわかる。江戸時代の船大工は木橋の建設も行っていたから金銭の寄付だけではなく、建設を奉仕したと考えられる。太鼓橋の寄進は当時の為政者によるものが多いのも事実であるが、地域の人々の協力で支えられていることもあり、この点をもっと解明していけば、太鼓橋の歴史的意味がさらに鮮明になるはずである。

3) 日本文化解明の価値

繰り返しになるが、太鼓橋は日本独自の空間演出の形態の1つである。今回の考察では不十分さは否めないが、さらに歴史的関連性の考察を深めていけば、日本文化の深層や日本人の感性の解明につなげることができると期待される。

おわりに

考察は十分とは言えないが、現時点での結論をまとめておきたい。

- ・ 太鼓橋とは、神社の社頭などに建てられた反りの大きな橋のことをいい、一見進入を拒絶するように見せながら、結果として神聖な場所へ人々をいざなう舞台装置であると言える。

- ・ 太鼓橋の直接的なルーツは、浄土式庭園の反橋や京都五山などの三門前の石橋にあると考えられるが、古来日本人が育んできた橋へのイメージが背景としてある。

- ・ 反りの大きな太鼓橋は、鎌倉時代より以前には見られず、室町時代後期に現れる形態である。そして多くの太鼓橋が架けられたのは江戸時代以降のことであると考えられる。

参考文献

- 1) 日野西真定：日本人の橋の対する信仰、土木学会誌第 82 巻第 2 号、pp. 25～27, 1997. 2
- 2) 松村 博：日本百名橋、pp. 250～2, 鹿島出版会, 1998
- 3) 岸 俊男：小墾田宮の呉橋 飛鳥と宮都 9, 明日香風第 9 号, pp. 66～68, 1983. 11
- 4) 奈良国立文化財研究所：平城京東院庭園, 1998
- 5) 小松茂美編：法然上人絵伝上, pp. 100～1, 中央公論社, 1990
- 6) 森 蘊：「作庭記」の世界, p. 45, 日本放送出版協会, 1986
- 7) 森 蘊：日本庭園史話, pp. 33～9, 64～8, 69～124, 日本放送出版協会, 1981
- 8) 小松茂美編：一遍上人絵伝, pp. 149～153 中央公論社, 1978
- 9) 中根金作：庭の事典, 日本の名園, 朝日新聞社, 1986
- 10) 大西 廣：「住吉社頭図」の考古学, 天の橋地の橋, pp. 471～476, 福音館書館, 1991
- 11) 甲賀市：甲賀市史 6, pp. 564～5, 2009

(2016. 4. 11 受付)